

群 教 セ	G01 - 03
	平 29.265 集
	国語一中

意欲を持って、適切な根拠を選択しながら 論理的に話すことができる生徒の育成

——教科横断的な学習課題に対する

「話すこと・聞くこと」の活動を通して——

特別研修員 中村 一城

I 研究テーマ設定の理由

はばたく群馬の指導プランには、群馬県の国語科の課題として「自分の考えや伝えるべき内容を相手や目的に応じて表現すること」とあり、話すこと的能力を高める指導の充実が求められている。その中で第2学年では、解決に向けて伸ばしたい資質・能力として「立場を意識して論理的で分かりやすく表現することができる」ことが重視されている。

所属校の課題としても、生徒は発表に対しての苦手意識が強く、その発表が事前に準備した原稿を読み上げるだけとなっていることが挙げられる。そして、その準備した原稿は論理的に表現していないものが多く見受けられる。それは、相手意識が弱く、その結果、相手を納得させるために言葉を選んで論理的に話す力が弱いことを示している。そこで、ディベート形式の学習活動を取り入れ、相手意識を高めていきたい。その中で、意欲を持たせるために、教科横断的な学習課題を設定し、また、適切な根拠を示しながら論理的に自分の考えを話すことを検討するために、時間設定の工夫を取り入れていく。

以上のことから、意欲を持って、適切な根拠を選択しながら論理的に話すことができることを重視していくこととし、上記の研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

生徒が、意欲を持って、適切な根拠を選択し、論理的に話すことができるようになるための方法として、以下の手立てを通して授業改善を図ることとした。

○学習意欲を高める手立て

生徒が意欲的に取り組むために、教科横断的な学習課題のディベート（注）を設定する。

○話す・聞く力を高める手立て

適切な根拠を選択し、話の論理性を考えるために、ワークシートの工夫と時間設定の工夫をする。

（注） 生徒がテーマに応じた根拠の収集、選択の難しさを実感し、意欲を持った学びにつなげるために、肯定側・否定側に分かれての一般的なディベートとは異なる、二者択一のテーマでのディベート形式の学習活動を行った。（以下、本来は「ディベート形式の学習活動」であるが、「ディベート」と用語を統一する。）

学習意欲を高める手立てとして、教科横断的な学習課題を設定した。他教科との関連を図ることで、生徒が他教科の学習内容を基に、意欲を持って取り組めるようにした。1学期には、技術・家庭科の家庭科分野と関連して「最高の給食メニューを決めよう」というテーマでプレゼンテーションを行った。この学習で、生徒は他教科との関連により既習事項を基に意欲を持って取り組むことができていた。そこで2学期には、社会科の歴史分野から、「徳川家康が幕府を開くのは、京都がよいか、江戸がよいか」・「関ヶ原の戦いで、石田三成に付くか、徳川家康に付くか」という二つのテーマを設定した。

話す・聞く力を高める手立てとしては、まず、単元の見通しが持てるワークシートを工夫した。全6時間の流れとそれぞれの授業の目標を初めから示し、生徒が見通しを持てるようにした。また、細かなディベートのルールも示した。さらには、論理的な話の構成や立場を意識した根拠の収集と選択ができるように、自分たちが調べた根拠を書き込めるようにした。相手の立場からの質問を予想し、記入できる項目も設定した。そして、ディベートを行う際に、本来は臨機応変に行う反ばくの場面で、質問を考える時間、根拠を選択する時間を分けた活動を取り入れることで、話すこと・聞くことの臨機応変な活動に慣れていない生徒でも、適切な根拠を選択して根拠を述べられるような活動を行うことができるようにした。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 他教科との関連を意識し、教科横断的な学習課題を設定した活動は、「話すこと・聞くこと」において知的好奇心や興味・関心を持たせ、単元を通して高い意欲を維持して活動することにつながった。また、生徒たちは意欲的に根拠の収集を家庭学習で行ったり、ディベートのリハーサルを行ったりと、自分たちの現状を把握し、そこからより自らを高めようとする姿を随所に見せていた。こういった生徒の姿から、教科横断的な学習課題の設定が、生徒の意欲への喚起と継続に有効であったと考える。
- ワークシートを工夫したことは、活動に見通しを持ち、より多く根拠の収集をすること、適切な根拠の選択をすること、論理的な話を構成することにつながった。さらに、判定する側も、教師が判定する際の規準を示し、「○」を付けるだけでどちらが良いディベートだったかを判断できる項目を設けることで、取り組みやすい活動にできた。また、「作戦タイム」という時間設定を細かくディベートの中に取り入れたことにより、適切な根拠の精査と論理的に話すことにつながり、深い内容のディベートとなった。
- 他教科と同時進行で進めることで、他教科の学習内容の理解の深まりにもつながった。

2 課題

- それぞれの生徒が努力はしていたが、調べたことを自らの言葉として話すことについては十分に達成することができなかった。そこで、話し方の例を事前に示し、型を示すなどの工夫が必要である。

実践例

1 単元名 「異なる立場から考え、ディベートをしよう！」（第2学年・2学期）

2 本単元について

言語活動例イの「社会生活の中的话题について、司会や提案者などを立てて討論を行うこと」を基に、本単元では、ディベートを行う。その中で、発言者は、論の趣旨を明確にするとともに、異なる立場の考えを想定して、自分の考えを分かりやすく話す言語能力を身に付ける。

ディベートという言語活動には、「説明して聞き手の理解を得る」「相手の意見を予想して、根拠を考える」「どちらの論に説得力があるか聞いて、判断する」などの明確な目的が存在する。クラス一斉の話合いと違い、一人一人の役割があり発表の機会を持たせられること、質問や質問に対する根拠を考える時間を確保できることにより、適切な根拠を選択し、立場を意識した論理的な話し方の実践的な学習が可能であり、本単元の言語活動として適している。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	立場を意識し、適切な根拠を選択しながら、一貫した論のディベートができる。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> 言語能力を意識して、ディベートに適した話し方を工夫しようとしている。 ディベートの立論や質問する際に、互いの考えを伝え合えるように、最後まで相手の話を聞いたり、話の方向性を意識したりして、話し合おうとしている。
	話す聞く能力	<ul style="list-style-type: none"> 根拠を考え、適切な根拠を選択しながら話している。 何のための話合いであるかを理解して、自分の考えとの相違点を比較しながら、メモを取って、質問や評価の根拠を考えながら聞いている。 立論や反ばくを述べる際に、どのような根拠をどのような順序で話したら異なる立場の相手や、判定する側の人の方が分かりやすいかということを考えている。
	言語についての知識・理解 ・技能	<ul style="list-style-type: none"> 指示語や接続語、論の組み立てなどに注意して、話したり聞いたりしている。 意見を伝え合うとき、具体的な根拠を基にして、話したり聞いたりしている。
過程	時間	主な学習活動
課題 把握	第1時	<ul style="list-style-type: none"> ディベートをする様子の映像を見て、ディベートのイメージを持つ。 ディベートのルールを確認する。
	第2時	<ul style="list-style-type: none"> 課題把握のために「中学校の昼食は、給食がよいか弁当がよいか」というテーマについて、ディベートをする。 「徳川家康が幕府を開くのは、京都がよいか、江戸がよいか」「関ヶ原の戦いで、石田三成に付くか、徳川家康に付くか」というそれぞれの班と立場を決定する。
課題 追究	第3・4時	<ul style="list-style-type: none"> グループで根拠を集める。 相手の質問を予想したり、意見について考えたりする。 ディベートの進行案を基に、立論・反対尋問・最終弁論を整理する。
	まとめ	第5・6時

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は、全6時間計画の第6時に当たる。生徒は、単元の終末に以下のテーマでディベートを実際に行うことを目指して学習活動に取り組んできている。意欲を持って活動に取り組み、テーマに対しての根拠を準備したり、確かな根拠を基にディベートの判定をしたりするための方法として、次のように手立てを具体化した。

社会科と関連させた、「徳川家康が幕府を開くのは、京都がよいか、江戸がよいか」、「関ヶ原の戦いで、石田三成に付くか、徳川家康に付くか」という二つのテーマについてディベートをする。

- ・活動の見通しが持てるワークシートを本単元の初めに生徒に配布する。
- ・課題把握のために「中学校の昼食は、給食がよいか弁当がよいか」について模擬ディベートを行う。
- ・根拠の収集、根拠の選択、相手の立論や質問を予想するワークシートを配布する。
- ・ディベート中でも、相手の質問に対する根拠の選択や論の組み立てが論理的にできるように、「作戦タイム」という時間を設定する。
- ・今回のテーマについては社会科の歴史の授業で同時期に扱っている学習内容であり、社会科の学習内容も深まり、また生徒の意欲の喚起と継続につながるようにしている。

4 授業の実際

本時は、前時までに記入した図1のようなワークシートを用いて、ディベートをすること、評価することを主な学習活動として設定した。

教室を二つに分け、一方では「徳川家康が幕府を開くのは、京都がよいか、江戸がよいか」を、もう一方では、「関ヶ原の戦いでは、石田三成に付くか、徳川家康に付くか」についてのディベートを行い、評価者は、自分が担当するテーマではないディベートの評価をし、公平な評価がしやすいように配慮した。

ディベートの際は、立論の根拠が視覚化され、その後の議論がかみ合うようにするために、短冊に根拠を書き示すようにした。

<p>予想される根拠 (江戸)</p> <p>S1: まだ発展できる土地で、川などを整備すれば物流が発達しやすい。</p> <p>S2: 京都は長い戦乱で資源が枯渇しており、環境も決して良くはない。</p>		<p>予想される質問 (京都)</p> <p>S1: 京都にも、近くに権力を持った敵がいて危ないのではないか。</p> <p>S2: 京都ではすでに拠点を失っていて、十分な活動ができないのではないか。</p>
--	--	---

図1 ディベート準備表

「関ヶ原の戦いでは、石田三成に付くか、徳川家康に付くか」というテーマでの一場面

S1: (立論・石田派) 僕たちは、石田がいいと思います。その理由は三つあります。一つ目は家康と違って短気でないこと。二つ目、優秀だったこと。三つ目、裏切りがなかったらということです。一つ目、石田三成は家康と違って短気ではない。徳川は関ヶ原で小早川を裏切らせるように命令。小早川がなかなか実行しないところに砲弾を撃つという考えられない行動をした。こんな家康についていたら・・・【中略】もし、三成が勝っていたら、刀狩りのおかげで争いの少なかった豊臣政府の行いや、豊臣家の幕府で存分に能力を発揮できたはず。このことから家康につくより、三成についての方がいいと思います。以上です。

S2: (立論・徳川派) 一つ目は律儀で我慢強く、人気と実力の差があることです。これは、6才～17才まで人質だったことから、常に命の危険にさらされていたので、約束を守る性格は自然と身に付いたと考えられます。そして人気と実力の差は、徳川は人使いが上手で治めていた領地は関東地方のほとんどです。それに比べ、石田三成は滋賀県の一部です。二つ目は、短気で戦いに向いている、です。戦場では怒りやすかったと言われています。ですが、その怒りっぽさは戦いに向いていると言えます。私はバスケット部に所属しています。バスケットは接触のスポーツなので、強い気持ちが大切です。それは戦場でも同じだと思います。戦場での怒りっぽさは戦にとっても向いていると思います。三つ目は、健康に気を付けて質素な生活をしていて、です。豊臣とは違って、質素だと言われています。薬にも強い関心を持ち、自ら薬を調合するほどです。こうした健康志向があったおかげで、長寿の73才まで生きました。以上です。

アンダーラインで示したように、適切な根拠(数字、具体例)、論の組み立ての順序を示しながら、論理的なディベートをする様子が見られた(次頁図2)。

相手の立論に対して、「家康のように、短気ではない。こういった性格こそ上に立つ者としては必要で、付き従いたくなる人物だ」や、「怒りっぽさ（短気）があるからこそ、戦いという場面においてはリーダーシップを発揮できて、そういった人物にこそ従いたい」という点で、話し合うことができている、論点を踏まえて話し合う様子が見られた。

また、評価する側の聞き手は、真剣に立論を聞き、どちらの根拠により説得力があるかをワークシートに書き込んだり、ワークシートに示されている「論理性、具体性」といった観点を基に、「○」を付けて優位性を考えたりすることができていた。さらに聞き取れなかった点についても、近くの友達に聞くなどして補うことができていた（図3）。



図2 立論を述べる様子



図3 教室の様子

授業の「振り返り」の場面では、「もっと数字を出して、相手の論よりも良い根拠が出せたら、勝つことができたかもしれない」や「最終弁論までは自分たちの方が優位だったのに、相手の最終弁論のまとめ方がうまく、逆転されてしまった」というように生徒自らが具体的なことに気付くことができていた。単元全体としての感想でも、「ただ、資料を多く集めて、根拠を出すのではなく、その場での相手への質問や反論が勝負を大きく左右すると思った」や「評価する側も大変だった。どちらの根拠の方がより論理的かというように頭を使うことが多かった」という内容があり、生徒の思考の深まりを実感できる授業ができた。

5 考察

- 教科横断的な学習課題のディベートを通して、どのような根拠を選択しどのような順序で提示すると、より論理的に自分たちの立場が主張できるのかということを考えられるようになった。話すことへの意欲が乏しかった生徒が教科横断的な学習課題によって、熱心に取り組むことができた。
- 論理的に話すことをワークシートの工夫によって追求した結果、相手の考えを聞く際にも、矛盾点や説明不足で相手の弱点を突けそうな、論点として争える根拠を確実に捉えることができるようになった。
- 「作戦タイム」があることで、自分たちが予想した相手の意見が出てきたときに、適切な根拠を選んで反論をし、最終弁論を述べる際にも、自分たちの立場だけでなく、相手の立場を踏まえたまとめの話ができるようになった。

ディベートに対するイメージ喚起、練習、細かなルール設定、グループ分け、根拠を調べる時間というような具体的な手立てを取り入れたことで、生徒は目的意識や目標を持って学習することができていた。

しかし、実際には時間制限があり、相手の立場があるといったことにより、根拠はあるにも関わらず、より適切な根拠を提示できなかったことを残念がる生徒がいたり、論を述べる際に調べたことをそのまま読み上げたようになってしまいうことで説得力が足りなくなってしまうと感じたりする生徒もいた。実践をしたことで、生徒が感じたこのような点を踏まえ、これからの実践では、反論の述べ方の例を提示したり、質問の仕方の例を提示したりして、話し方の基本の型を押さえたい。そして、ワークシートのさらなる工夫やメモの仕方などを考え、継続して実践に取り組みたい。

6 資料

【資料1 単元振り返りシート】

国語 単元振り返りシート 二年 組 番(名前)

単元名 「異なる立場から考え、ディベートをしよう」

目標 相手・目的意識をもち、適切な根拠を選択しながら、一貫した論のディベートができる。

目標

振り返り

1	ディベートについて理解し、ルールを確認しよう。	
2	ディベートの練習しよう。	○江戸が京都び、○田原が、徳川へ
3	自分の立場グループを法的、根拠を築めよう。	
4	根拠を集め、相手の立場を考え、ディベートの内容を整理しよう。	
5	相手の立場になって考え、的確かつ具体的な根拠のあるディベートをしよう。	
6	相手の立場になって考え、的確かつ具体的な根拠のあるディベートをしよう。	

【今回の学習振り返り】

単元を振り返って

- ・ 社会に僕たちが進出する上でとても重要な学習だった。なぜならどの仕事でも企画の話合いや会議などに今回のディベートは応用されるところだったからです。

【資料2 ディベートルール】

異なる立場から考え、ディベートをしよう ① 二年 組 番

ルールの提示

- ・ ディベートの流れとルールを具体的かつ細かく示したことで生徒が迷うことなく活動できた。また作戦タイムがあることで、根拠を精選する活動を丁寧に行うことができた。

異なる立場から考え、ディベートをしよう

ルールの提示

- ・ ディベートの流れとルールを具体的かつ細かく示したことで生徒が迷うことなく活動できた。また作戦タイムがあることで、根拠を精選する活動を丁寧に行うことができた。

ディベートの型(例)

可決 1分

1. 立論 2分

①肯定側 2分

②否定側 2分

作戦タイム 2分

2. 反対尋問 2分

①肯定側 2分

②否定側 2分

作戦タイム 2分

①肯定側 2分

②否定側 2分

作戦タイム 2分

①肯定側 1分

②否定側 1分

判定 2分

合計 20分

【資料3 ディベート判定表】

異なる立場から考え、ディベートをしよう ⑤ 二年 組 番

「○」をつける評価

- ・ ディベートの判定では、迷った際に簡単に記入でき分かりやすいように、「○」を付けるだけでどちらの論に説得力があったかを考えられるようにした。

講評	立論		根拠		反駁		弁論		全体	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
計 / 7										
計 / 7										

講評 (一部生徒の考えを抜粋)

- ・ 反ばくはあまり的確ではなかったが、最終弁論でしっかりまとめた。
- ・ 相手の質問に対する根拠は良かったが、最終弁論で強調できず、逆転した。